日本の存在感

東洋学園大学現代経営学部　教授　木村　壮次

日本の政治・経済の国際面での存在感が著しく低下している。政治面では再三再四の首相交代劇。明日にも交代するようなリーダーに信頼を寄せるほど国際舞台は甘くない。経済面ではGDPが中国に抜かれ，世界の№.2から転落するのは時間の問題となっている。巨額の財政赤字も他国から危惧されている。ギリシャの財政危機を契機として，6月にトロントで開催されたG20サミットで，先進国は「16年までの政府債務削減計画に合意した」が，日本は対象外となった。これは日本が達成不可能であると見られているためだ。巨額の財政赤字を抱える国が，世界経済の成長に貢献するということは期待されず，日本の地位はますます低下しよう。

日本の財政赤字が世界から注目されているのに，当事者たる民主党政権は消費税問題を先延ばしするなど，事の重要性を十分認識されていない。現に，マニフェストで宣言した「子ども手当て支給」，「高速道路無料化」，「農家への所得保障」などの公約は続けるべきだ，「お金が無いからやらないという，そんなバカな話はない」という議論もある。なんともお粗末な議論である。国家も家計も個人も，収入と支出のバランス，「分度」をわきまえて行動するのは当たり前のことである。「分度」の考え方は二宮尊徳の教えにある。政治家は尊徳から学んで欲しいものである。

ダメな政治，経済の一方，科学技術，スポーツ面で日本の存在感が世界にアピールされたことは感動的であった。7年間の宇宙の旅から帰還した小惑星探査機「はやぶさ」は日本人に勇気と誇りを与えてくれた。エンジン故障，通信途絶など絶体絶命のピンチを何度も乗り越えて，小惑星に着陸し，地球に戻って来るという宇宙大国のアメリカやロシアも及ばない快挙を達成したのだ。こうした明るいニュースがなかったならば，ダメな政治主導によって，科学技術予算は事業仕訳で先細りになるところであった。文部科学省は「はやぶさ2」の開発費用として17億円要求していたが，目先のことしか考えない民主党政権になってから大幅に削減され，わずか3千万円に減額されたという。ちなみに日本の宇宙科学・探査予算はアメリカNASAのわずか2％に過ぎない。「はやぶさ」は，日本の科学技術の将来への展望をも救ってくれたのである。

もうひとつの明るい話題は，サッカーの日本代表（サムライブルー）の活躍である。ワールドカップ（W杯）南アフリカ大会は，日本人の組織力の素晴らしさ，重要さを再確認させてくれた。単なる足けりのゲームに過ぎないのに大騒ぎしていたとの人々がいないではなかったが，日本列島に住む大多数の国民は大いに勇気づけられ，仕事などの励みにもなり沸騰した。

多くの国民は，大会直前までの歯がゆいチーム状態，岡田監督の采配振りからダメだろうと半ばあきらめながらテレビを見ていたと思われる。しかし，カメルーン戦に勝ち，敗れはしたが強豪オランダと接戦した後，デンマークを破って決勝トーナメントに進出したのだ。海外メディアも日本の活躍を大きく扱ったようだ。デンマーク戦翌日の6月25日付のイギリスのタイムズは，「サムライ，制球術に熟達」と絶賛し，ガーディアンも本田と遠藤のフリーキックを超弩級と評し，日本がパラグアイに敗れた翌日も，タイムズは「日本はベスト16に大変な魅力をもたらした」と退場を惜しんだという。アメリカのニューヨークタイムズも，岡田監督に対する評価の豹変ぶりを含め大々的に扱ったと言う。

ともかく，現在，小中高生達を含め，多くの日本人は，将来への夢や希望を失っているようだ。こうした中で，本田選手たちは「努力すればできるのだ，頑張り続ければ必ず良いことがある」とのメッセージを伝えてくれた。

韓国と共催した02年W杯で日本が世界を驚かしたのは，日本独特のホスピタリティー（もてなしの心）だったという。22年W杯の日本招致を成功させるためには，政治，経済の存在感がなくてはならない。科学技術力とホスピタリティーは，日本が世界に誇るべきものである。

※記事・写真等は（財）建設物価調査会の許諾を得て転載しています。
著作権は（財）建設物価調査会に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りします。